

【第1部】 基調講演「科学鑑定の現状と課題」

〔基調講演1〕

アメリカの炭疽菌テロと日本のサリン事件に おける科学捜査方法

(コロラド州立大学名誉教授)

杜 祖 健 [Anthony T. Tu]

1. 科学証拠によるテロ事件の捜査を指導

——サリン事件との出会い——

石塚先生からご紹介いただきましたコロラド州立大学の Tu でございます。私の日本語は、日本の植民地だった時代に台湾で身についたものです。私は台湾からアメリカへ留学したのであまり日本と関わりがありませんでしたが、サリン事件以降、日本と非常に関係が深くなりました。今日はサリン事件とアメリカの炭そ菌事件についてお話しします。サリン事件は皆さんご存知だと思いますからごく簡単に、主にアメリカの炭そ菌テロ事件について、サリン事件とも関係あるところを付加しながら話していきたいと思います。

毒物に関係する事件が起きた場合、一番重要なのは「毒物は何か」。その次に「どこで起きたか（毒物を使った事件であればその毒がどこで作られたか）」、それから「誰がおこなったか（作ったか）」、この3つを解決することです。日本の場合は5日間ですぐにサリンとわかりました。長野県の公害研究所がつきとめました。当時はサリンの標準物質が日本になかったのにサリンと解明したのは非常に大きな功績でした。一方、アメリカの場合も炭そ菌ということは1週間くらいでわかった。アメリカも日本もわ

りと分析能力が高いですから、「何か」ということはすぐにわかったのです。そして日本の場合、サリンは実際には山梨県の上九一色でオウム真理教が作っていましたが、そこがわからなかった。私がお手伝いしたのはここなんです。日本の科学警察研究所（科警研）から手伝ってほしいとFAXをいただいて、サリンは地中で安定した化合物になるものですから、それを見つければ誰がサリンを作っているかがわかります。そこで検出方法をアメリカ陸軍に問い合わせてすぐにお知らせしました。ですから日本の警察は、1994年の9月21日時点で、地面からサリンの分解物が検出されると分かったわけです。9月の末か10月のはじめに長野県警が上九一色へ行って第1サティアン近傍の土を持ち帰り、東京の科警研で検査したら、メチルホスホンサンが検出されました。それでオウムがサリンを上九一色村で作っていることが分かりました。

アメリカの場合、この部分で随分時間がかかりました。アメリカ陸軍の誰かがテロ事件に関与していることは早くから分かっていたのですが、犯人特定までに6、7年かかった。日本の場合はサリンと判明したのが1994年7月3日、上九一色村でオウムが作っているときとめたのが10月です。4ないし5か月で「何を」「誰が」「どこで作ったか」が分かりました。

2. 中川死刑囚と面会をかさねて見えてきたこと

サリン事件では、オウムのことは大分解明されたと言われていますが、まだ細かい部分でわからないところがあります。そこで私は日本の法務省から許可を得て、特別に中川智正死刑囚との面会を過去に6回おこないました。今月（2015年3月13日）にも面会に行きます（この講演は3月1日に行われた）。普通、死刑囚との面会は5人のみ、1週間に二人しか許可されていません。面会時間はだいたい10分間ですが、私は30分間いただいています。私はサリンの化学的・生物学的な部分を知りたいのです。日本（龍法 '15）48-1, 576 (576)

の新聞・雑誌、テレビの方は「もうすぐ死刑になるがどういう気持ちかと聞きたいんですけど、中川死刑囚と面会して、先生が聞いていただけませんか」と言ってきますが、私がほんとうに聞きたいのはオウムがどうやって化学兵器や生物兵器を作ったかと言うことで、個人的なことはあまり聞きません。相手がたとえ死刑囚でも、私は一個人として対等につきあい、彼の感情を害するようなことは極力避けています。一番初めに私が聞いたのは「サリンや VX を作るアイディアはどこから得たのか」でした。中川さんが言うには、サリンを作ることは、土谷正実がブルガリアの人が書いた「毒の話」という翻訳本を見て決めた。そして VX は、私が「現代化学」に発表した資料からアイディアを得て作ったと言うのです。驚きました。当時日本では文献が少なかったものですから、私が「現代化学」に書いたサリンや神経毒についての論文はみんなが読んでいて、警察もオウムも同じ資料を同時に読んでいたんです。

それから私は、サリンを作るのにロシアの援助があったかと聞きました。すると中川氏ははっきり「ない」と言いました。「みんな自分で考えて作った」と。筑波大学や東京工業大学の図書館、国会図書館で文献を調査して自分で作ったと言っていました。それからオウムはジアチルアニリンを使っているんですが、それは土谷が考案したと言うんですね。それから95年1月1日に、読売新聞は日本の警察が上九一色の地面から有機リンを見つけたと発表した。この発表は、今から考えれば非常に影響が大きかった。オウムはこの記事を見てびっくりして「もう全て作るのをやめよう」と、どんどん化学兵器、生物兵器を壊していった、そういうことを中川氏が話してくれました。

それから松本と地下鉄のサリンの合成法が少し違う点も聞きました。サリンはだいたい5つのステップで作られます。松本の場合は第2ステップから第5まで作った。地下鉄の場合はいちばん最後の部分から作りました。だから少し違うんです。また、「異臭事件」の原因として、第7サティア

ンという大きな建物で第1ステップから作ろうとしたわけです。ところが経験がないものですから漏れた、それがいわゆる上九一色での異臭事件です。

さらに第7サティアンでは、科警研の発表内容とオウムが言う内容が合わない部分があります。中川氏に言わせると、初めは第7サティアンで70tを目標に作り始めたんだけど、読売新聞の記事を見てびっくりして第3ステップで止めてしまったと。ですから第4、第5のステップは作っていないと言うんです。ところが科警研は、オランダとアメリカに対して、第7サティアンの設備から第3、第4、第5ステップの作業をおこなった痕跡として、メチルホスホンサンがみつかったと発表しました。そこが整合しないものですから、私はこれを確かめるためにもう一度面会を要求しました。「君の知らない間に、第4、第5ステップの作業をして設備を使うことはないか」と。すると中川氏は「それはない」と。自分は医師だから、サリンを作るときには非常に危ないので必ずそばにるように言われる、もしけが人が出た時はすぐに治療できるように自分が待機すると言うんです。ですから第4、第5ステップの作業のためには設備を使っていないと言うんです。この点、事実が整合しない。どういう原因なのかはいまだにわかりません。アメリカのテロ専門家もこの矛盾に気がついており、私はこういうことは日本の警察が率先してはっきりさせるべきだと言いました。

それから、オウムの生物兵器の製造は、全部失敗しています。みんな、オウムは化学兵器が主で、生物兵器は片手間にやったとしか見ていません。ところが中川氏が言うのには、オウムは初めから生物兵器のほうに重点を置いていたと。主にボツリヌスと炭疽菌を作ろうとしたんですが、二つとも失敗した。実際にまいたけれど全然効かない。そこで麻原彰晃が、生物兵器はだめだ、化学兵器にしようとか村井秀夫に相談した。村井が土谷を麻原に紹介して、それから化学兵器製造に移行した。土谷は優秀な科学者な

ものですから、ばぱっとサリンを作ってしまった。VXや他にもいろんなものを作っていました。読売新聞の記事を見て壊してしまったけれど、読売新聞がばらさなければもっといろんな化学兵器が作られ使われたかもしれません。



これが上九一色にあるオウムの製造所です。松本のサリン、東京地下鉄のサリンはここで作られました。第7サティアンで70tを目標に作られた。でも最終的にはサリンは、第7サティアンでは作ってなかったわけです。

では今度はアメリカの炭疽菌についてお話しします。まず、サリン事件と炭そ菌テロ事件を比べると、日本の場合は6月27日に松本で初めてサリンが使われた。アメリカの場合は2001年の9月末から10月の初めに炭疽菌が使われました。日本の場合は化学テロ、アメリカの場合は生物テロですが、どちらも民間に対して使われたのはこれが初めてです。日本の場合、解決までにだいたい9か月、アメリカの場合は約7年間かかりました。目的は何だったかという、日本の場合は、オウムが政府を転覆する目的だったと。ですから化学兵器も生物兵器もその道具として使いました。アメリカの場合には、陸軍の研究所の人が研究費を増やす目的でした。炭疽菌事件が起きればアメリカ政府が驚愕して炭疽菌の研究費を増やさざるを

得ないことになる。その点から言うと成功したわけです。非常に研究費が増えました。日本のサリン事件は科学者が100人くらい集まってサリンを作りました。アメリカの場合は単独犯。オウムの場合は100人もいるから誰か一人でもしゃべりだしたらすぐにわかってしまう。アメリカの場合になかなかわからなかったのは単独犯だからです。

実行方法は、日本の場合、松本では噴射、地下鉄の場合は先のとがった傘で袋を破ってサリンをばらまきました。アメリカの場合、炭疽菌の芽胞の粉末を5通の封筒に入れて郵送しました。5通だけですが、それで5人死亡、17人が中毒発症しています。オウムはずいぶん炭疽菌を作りましたが一人も死んでない。だからオウムの炭疽菌兵器は失敗です。これをアメリカは不思議に思っています。アメリカの場合、封筒5通でこれだけの死傷者が出た。オウムの場合は大量に炭疽菌を作ったのになぜ効かなかったか、と。

そして日本の場合、作ったのは上九一色。アメリカの場合はメリーランド州フォート・デトリックのアメリカ陸軍感染症医学研究所です。化学分析は、日本の場合は地中からのサリンの分解物の検出、地下鉄の場合はたくさん残っているから、袋の中身を分析してすぐにサリンと分かりました。アメリカの場合はDNAを分析してすぐに炭疽菌と分かりました。その他には多くの状況証拠がありました。結果として日本では13人の死刑判決、アメリカでは本人が自殺しました。

3. 科学証拠に基づく冤罪の可能性

日本の場合もアメリカの場合も、間違った嫌疑者がいました。日本の場合は河野義行さんが嫌疑者になった。アメリカの場合は、スティーブ・ハットフィル (Steven Hatfill) が嫌疑者になった。河野さんは第1通報者だった。第1通報者というのはやはり、すぐに嫌疑される対象になりま
(龍法 '15) 48-1, 580 (580)

すよね。その他に河野さんの自宅や庭からサリンがみつかった。それからこの人は科学者だから、有機リンなどをもっていたんですね。で、当時の日本のサリンに関する知識レベルは非常に低かったものですから、この有機リンを見て「お前が作ったにちがいない」という風になってしまったわけです。アメリカの場合、このハットフィルと言う人はアメリカ陸軍の研究所にいた。FBI は当初、犯人はどこの誰かわからないけれども、炭疽菌がアメリカ陸軍由来だと分かった。この人はアメリカ陸軍にいた。それから、この人の昔のボスが生物テロにどう対処したらいいかということを実はアメリカ政府の依頼で調査していました。この人はそのお手伝いをしていて、調査の結果を「将来、テロリストがアメリカで、封筒の中に乾燥したバイ菌をいれて郵送してテロを起こす可能性がある」と述べていました。実際に炭疽菌の封筒が郵送されたわけです。そこで状況証拠によってこの人ではないかと、だいたい5年間嫌疑がかかっていました。そしてこの人でないとわかってアメリカ政府は580万ドル弁償しました。河野さんはもっていない。河野さんはいらないと言ったと聞いています。

嫌疑の理由をもう少し詳しく言うと、炭疽菌の粉を入れた封筒の送り先が小学校の名前になっている。FBI が調べたらアメリカ全国にこういう名前の小学校はなかったんです。ところが、アフリカのローデシア（ジンバブエ）にこの名前の小学校があります。そしてこのハットフィルという人、嫌疑者は昔、アメリカに来る前にローデシアにいました。それから、炭疽菌の特効薬はシプロという薬なんです。この人はシプロを服用していました。でもこれは偶然なんです。たまたま病気でお医者さんがシプロを処方したのです。それから FBI が、この人がレストランで食事している時に犬を連れて行ったら、犬が、彼が食べてるところで止まってワンワン吠えだしたと言うんです。そういうことが2回ほどあった。だから、こいつはまちがいないと言うのです。今から考えると、科学者ですら警視庁とか裁判所に迎合的なデータを作る人がやっぱりいるわけです。ですから

犬も、自分のボスがこういう風にしてもらいたいと思っているのが分かるんじゃないかと思います。

炭疽菌膜に囲まれていて非常に安定しています。ですから、炭疽菌はどの国からも生物兵器として重宝がられているんです。

生物兵器にしろ、化学兵器にしろ、作っただけではダメで、運搬が必要です。アメリカの場合には炭疽菌の芽胞の粉末を封筒に入れてフロリダ州の出版社に送って、出版社の社長さんが亡くなりました。それから国会議員やテレビ局にも送りました。2001年の10月4日にフロリダの編集者が死んだ2、3日後、私は2つの電話を受けました。一つはアメリカの大きな新聞社、シカゴ・トリビューンです。もう一つはフィラデルフィアにあるWHYY というテレビ局からです。フロリダで一人炭疽菌で死んだけれど、あれは生物テロによるものですか、と聞かれました。私は生物テロではないと答えました。なぜかと言えば、生物テロならば同じようなケースが他にも出てくるはずだけれども、私が電話を受けた時は被害者はこの人しかいなかったのです。だから、生物テロでない、生物テロだったら同じようなケースがたくさん出てくるはずだと。そして、電話を切った翌日くらいから、ぼつぼつと同じケースが出始めました。ですから電話が1、2日遅ければ私は生物テロと言えたんだけれども、電話を受けた時は被害者が一人しかいなかったものだから、生物テロではないと言って間違えてしまいました。

炭疽菌のDNAの分析方法は色々あります。炭疽菌はDNAの変化が少なく99%みな同じです。1%だけがちょっと違う。ですから炭疽菌のDNAの分析は非常に難しいです。

そして、封筒を開けなかったのになぜ死亡したのかと言えば、封筒には紙の表面に小さな穴がたくさんあり、中に入れた炭そ菌の粉末は結構に細かいのでこの穴から出てきます。そのために郵便局員が死亡しました。炭疽菌は条件を変えると芽胞になります。芽胞を遠心分離器にかけると下に

沈殿します。ここまでは誰でも作れますが、ここから生物兵器にするのは難しいのです。この段階では粘着性があるからくっついてしまう。くっついてしまうと生物兵器にならない。というのは粉末にするから空气中に浮遊して人間が吸う。吸ったら死ぬようになります。ですから固まった状態では生物兵器になりません。それでアメリカ陸軍はタルクを使います。そうすると粘着せずに非常に細かい粉になる。また、イラクとかイギリスの炭疽菌兵器はタルクではなくてベントナイトを使っています。そこで最初 FBI は、アメリカ東部にある製薬会社や大学の研究施設などを調べました。それから封筒がどの郵便局からフロリダや NBC、ニューヨーク、国会に行ったか、封筒の分布経路を調べました。

図1 炭疽菌テロ関係図

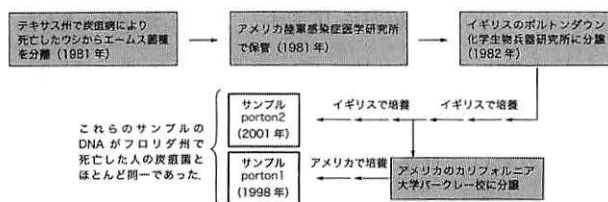


炭疽菌には主に3つの種類があります。アメリカ産の Ames Strain、それからイギリスとイラクが使っている炭疽菌兵器は Vollum という Strain。それからワクチンに使うのが Sterne Strain、これは無毒です。ですからアメリカでは、日本のオウムの炭疽菌が失敗したのは、間違っってこの Sterne Strain を使ったんだろうと言っています。ところが私が拘置所で中川智正死刑囚と面会した時は、違うと言っていました。炭疽菌を作った遠藤誠一は、自分が使った炭疽菌は無毒だが、遺伝子工学の発展で無毒の炭疽菌を有毒に変換できると考えていた。ところがやってみたらで

きなかったと。初めから無毒と分かっていた。無毒のものを有毒に変えようとしたけれども、最終的にできなかったのです。

ですから炭疽菌と分かっても、どの Strain か判明しないと由来が特定できません。当時はブッシュが大統領だったので、これが Vollum Strain であれば、イラクのアメリカに対するテロだと言ってすぐにイラク進攻しました。ところが分析したらアメリカ産だった。これが重要です。しかし、これは100年前にアイオワ州アーメスで分離され、世界中に散らばっているの、これだけではアメリカ人が犯人とはいえない。FBI はフロリダで死亡した人の炭疽菌のサンプルと、二つの標準試料を調べました。標準試料の一つはイギリスからもらった炭疽菌で“Porton 2”という名前を付けています。それからもう一つはアメリカのバークレーにあるカリフォルニア大学から炭疽菌をもらって調べた。これを“Porton 1”と呼んでいます。なぜ Porton と呼ぶかと言うと、この Porton と言うのはイギリスの化学生物兵器の研究所で、そこからもらったものだからです。そして、それは両方とも、元々、1982年に Porton 研究所がアメリカ陸軍からもらったものでした。分析したところ、この標準試料はフロリダのサンプルとほとんど同じでした。そこで FBI はアメリカの炭疽菌テロはアメリカ陸軍の誰かがやったのだと特定しました。

図2 検査に使用したサンプルの由来



犯人がアメリカ陸軍の関係者だとすると、3つしか可能性がありませんでした。一つはメリーランド州にあるエッジウッドの生物兵器センター。それからメリーランド州フォート・デトリックにある陸軍の一番大きな生

(龍法 '15) 48-1, 584 (584)

物兵器の研究所。それからもう一つが、ユタ州の生物兵器、化学兵器の実験場です。ここで働いているアメリカ陸軍の研究者、炭疽菌に関係ある人たちにサンプルを提出させました。アメリカ陸軍が持っている炭疽菌とフロリダで死亡した人の炭疽菌の DNA の差は4つしかありません。そして炭疽菌で死んだカリフォルニアとテキサスの牛のサンプルと、フロリダに送られた炭疽菌を比べると、12個または15個もの差がある。そのため、アメリカ陸軍が培養した炭疽菌はいろいろありますが、テロに使われたのはこの培養から来たとの違いないと言うことになりました。そこでこの培養の責任者であるブルース・エドワード・イビンズという人に嫌疑がかかりました。初めはハットフィルという人が嫌疑者だったけれども、そうではないだろうというわけで新たに見直しました。FBI はそれまでの調査委員会を全部解散して、新しい調査委員会をつくった。そうすると見方が違ってきます。新しい調査員が何に着目したかと言うと、アメリカ陸軍が炭疽菌を培養した時に、一度、技術者が落としてこぼしたことがある。それを報告していませんでした。このイビンズと言う人は炭疽菌の責任者なのに、炭疽菌のような危ないものが落ちて、割れてこぼれてもそれを報告していない。何かやましいことがあるのではないかと言うわけです。捜査の初めに、アメリカ陸軍の炭疽菌の責任者としてこの人に手伝ってもらいました。ところがこの人の報告書では、封筒の中の炭疽菌にはベントナイトが入っていたと言っていました。ベントナイトが入っていたならイラクの生物兵器の炭疽菌ということになります。ところが再捜査で実際に検査してみるとベントナイトではなくてタルクが入っていた。タルクが入っていることの意味は何かというとアメリカ陸軍が作った炭疽菌なんです。だからこれはイラクに罪を擦り付けようとしたのにちがいないと言うことで、追及していきました。そしてさらに犯人をアメリカ人であろうと特定したのは手紙の日付です。ヨーロッパ人は「11-9-01」（2001年11月9日）と書きますが、犯人の手紙には「09-11-01」とアメリカ式の表現で書かれていたため

です。

4. 状況証拠による犯人特定

実際にこの人が炭そ菌を封筒に入れるところは誰も見ていません。FBIは、状況証拠を固めるためにこの人の過去を全部調べました。たとえばこ

09-11-01

THIS IS NEXT

TAKE PENACILIN NOW

DEATH TO AMERICA

DEATH TO ISRAEL

ALLAH IS GREAT



表1 遺伝暗号表

	U	C	A	G
U	UUU Phe	UCU Ser	UAU Tyr	UGU Cys
	UUC Phe	UCC Ser	UAC Tyr	UGC Cys
	UUA Leu	UCA Ser	UAA オーガー	UGA オパール
	UUG Leu	UCG Ser	UAG アンバー	UGG Trp
C	CUU Leu	CCU Pro	CAU His	CGU Arg
	CUC Leu	CCC Pro	CAC His	CGC Arg
	CUA Leu	CCA Pro	CAA Gln	CGA Arg
	CUG Leu	CCG Pro	CAG Gln	CGG Arg
A	AUU Ile	ACU Thr	AAU Asn	AGU Ser
	AUC Ile	ACC Thr	AAC Asn	AGC Ser
	AUA Ile	ACA Thr	AAA Lys	AGA Arg
	AUG Met	ACG Thr	AAG Lys	AGG Arg
G	GUU Val	GCU Ala	GAU Asp	GGU Gly
	GUC Val	GCC Ala	GAC Asp	GGC Gly
	GUA Val	GCA Ala	GAA Glu	GGG Gly
	GUG Val	GCG Ala	GAG Glu	GGG Gly

表2 アミノ酸暗号表

アミノ酸	略号	
	三文字	一文字
アラニン	Ala	A
アルギニン	Arg	R
アスパラギン	Asn	N
アスパラギン酸	Asp	D
システイン	Cys	C
グルタミン	Gln	Q
グルタミン酸	Glu	E
グリシン	Gly	G
ヒスチジン	His	H
イソロイシン	Ile	I
ロイシン	Leu	L
リシン	Lys	K
メチオニン	Met	M
フェニルアラニン	Phe	F
プロリン	Pro	P
セリン	Ser	S
トレオニン	Thr	T
トリプトファン	Trp	W
チロシン	Tyr	Y
バリン	Val	V

の人は昔、精神科の医師への受診歴があるとか、この人は暗号を解く趣味があるなどです。嫌疑者 Bruce は、捜査当初、FBI を手伝ったため感謝表彰され、週末にはよく赤十字社でボランティア活動をした人です。そこで FBI は彼の過去のことを全部調べて心理学的プロファイルを作りました。そして国会議員に送った炭そ菌の粉末のほかに入っていた手紙を分析しました。

この手紙はTやAが太文字になっていました。そこで FBI はこの手紙の中に暗号を入れているんじゃないかと、AとTを組み合わせてみました。すると、TTTAATTAT となる。もしもこれが DNA ベースの配列のことだとすると、DNA の2つの Strand のもう一つの Strand は逆で AAATTAATA となります。これが m-RNA になると UUUAUUUAU となり、これは Amino Acid Phenylalanine (F)、Asparagine (N)、Tyrosine (Y) に対応します。そして一番最初の太い文字を並べると PAT になる。PAT というのは、昔彼が片思いした女性の名前です。そしてアミノ酸をそれぞれの物質名1文字で表せば FNY になる。FackNY「ニューヨークのばかやろう」と言う意味です。手紙のAとTが太字になっているのを組合せたところ、このようなことがわかりました。

そのため FBI はこの人が犯人に間違いないとせずずっと監視しました。アメリカでは週に一度トラックがゴミを回収に来るんですが、彼は夜中にトラックが来る1時間くらい前から待っていました。そして、彼はトラックがゴミを全部取っていったことを近所のゴミ箱を開けて確認していました。ところが FBI はゴミ集めのトラック会社と初めから連絡しているので、彼のゴミは FBI にすぐに渡してしまいます。彼のゴミから暗号の本と論文が出てきた。一つは音楽、絵、小説などには表に出ない裏の意味があるという本です。もう一つは DNA の暗号という論文です。これはまちがいないというわけで、FBI は彼を追及しました。本人はやっていないと言いましたが、証拠もたくさんあるからお前に間違いないと言い続けて、

本人は自殺してしまいました。FBI はほっとしています。前に5年間も間違った嫌疑者を追っていたためです。国会で FBI の所長が召喚されて「間違いはない、この人が犯人だ」と言い続けた。ところがそれが後で間違いだったとわかり、今度はブルースと言う人が嫌疑者になった。それで国会がまた FBI の所長に、ほんとうにこの人が実行犯かと聞く。FBI はまた「間違いありません、この人が犯人です」と言う。「しかし、別の人を犯人に間違いはないと言っていたではないか」「あれは間違いで今度はまちがいありません」と。ですから FBI もこの人が自殺してほっとしているのです。嫌疑者が死亡してしまったらもう解決ですから。FBI は状況証拠しか持っていなかった。その点は和歌山のヒ素事件と似ています。林眞須美がカレーにヒ素を入れたところを誰も見ていません。けれども鍋のそばにいたと証言する人がいると言う。でも、人間の証言ほどあてにならないものはありません。

メリーランド州の生物兵器研究所の司令官と私は、この研究所から研究費をもらっていたので知合いです。この司令官に自殺した嫌疑者のことを聞きました。「よく知っている、いい人だった」と言います。前の嫌疑者もアメリカ陸軍にいたことのある人で「あいつは感じの悪いやつだ」と言います。初めに嫌疑者になった人は感じが悪いので「こいつにまちがいがない」と誰もが思った、そして今度はブルースと言う人が嫌疑者になり、みんながまさかと言って信じない。「あの人は非常にいい人だ」と言う。

人間は表面だけではわかりません。いい人に見えてもやはり悪いところもある。「光と影」は、いつも両方が一つになっています。私自身、中川死刑囚と6回も面会して、「こんな人が？」と思います。感じもいいし、いつも朗らかで、何か聞いたらすぐにぱっと返事をしてくれる。けれども、中川の過去の犯行を調べているとやっぱり悪いと思う。死刑にならざるを得ないんですね。例えば、坂本一家殺害事件では、6人で現場に行つて、赤ちゃんが泣きだした。絞め殺したのは誰かという、中川です。それだ

けでもう死刑に相当すると思うんです。それから、坂本弁護士に塩化カリウムを注射したのも中川です。僕はそこを聞いたんです。

どういうふうにして注射しましたかと聞く。そうしたら彼は、少しムツとした様子で「塩化カリウムを注射して死ぬことはありませんよ」と言いました。「塩化カリウムで殺すためには静脈注射しないとだめです」。坂本弁護士が暴れて周りの人が早くやれと言うので、彼は注射したけれども、死んだのはそのせいではない。だから、裁判の認定でも死因は塩化カリウムではないとされているのだと言いました。

私のお話は、以上です。